

地名には地霊があるとよく聞いた。だから地名は大事なものですよと。

「俺は大阪やけど、河内の人間やさかい」  
これだけで、映画のワンシーンが出てきそうなセリフである。  
「ちょっとなんばの高島屋に行ってくる」とご主人、  
奥さんは「道頓堀違うの？」とチクリとひと刺し。

大阪、河内、なんば、高島屋、道頓堀と地名が出てくるが、大阪の人ならすぐ判るが他の人なら判るだろうか。第一、「なんば」などは地名かどうか判らない。「大阪」くらいはわかるが「河内」はもうひとつなのでネットで調べると「古代の国名で現在の大阪府の一部」などと出てきてまた混乱する。

「違う、違う、河内言うたら言い方がドギツイもんが住んどるとこや」と、河内人自ら説明するのが「河内」なのである。

「高島屋」を地名で調べても出てこない、大きなデパートなので地名として使われ、大阪市浪速区〇〇町などと言うより事には決してならない。

「道頓堀」は江戸初期に掘られた堀のひとつだが、ここで使う道頓堀は地名でもあるが繁華街・飲み屋・遊び場の意味で使っている。

古い旅行書や紀行文で各地の紹介や、街道旅ならその土地の説明をしている。その土地の地名を使うのだからこれを知るのが一苦労する。

まず、書いた人が地域外の人なら一般的に判る地名を使ってくれる。

さっきの言い方は「俺は大阪人やけど、東部の河内に住んでいる人間やから」こう書かれると場所だけは判るがムードのない駄目な本だ。

「河内の人間やさかい」と言うのは、地元の人はこの言い方しか書けないので他の人にはやはり理解できないが、地元の人を書く本はごく自然に地名を使い味があるが、読む側は場所もイメージも判るまで苦労する。

「高島屋」は現在もあり地図にもすぐ出てくる地名だが、「神戸の三越を南に行く通りで港に出る」とあれば、「大丸の間違いでないの」と思ったりする。神戸・元町商店街の東端が大丸百貨店なら、西端で神戸駅前に堂々とあったのが三越百貨店だ。三越がなくなれば三越という地名もなくなってゆく。最近。三ノ宮駅前のそごう百貨店もなくなり、今は「元そごう百貨店」の地名だが、いずれなくなるのだろう。それは、百貨店があり賑やかで人がいっぱい集まっていた場所のイメージの地名がなくなることでもある。百貨店の地名だけでなく、普通に使っていた地名が町の変遷とともに変わってゆき判らなくなってゆくいつも横にある地名は、やはり大事な、大事な地霊だ。